

男が旅を始めてから数か月の時が流れ、極北の地にも短い夏が訪れました。夜になっても太陽は沈まず、淡い光が優しく景色を包みます。白夜の世界です。

屋間原野に行く時、男の心に不安などカケラもなく、ただただ歩くのに夢中でした。未知の世界を見たい気持ちがいっぱい、あの谷の先に何があるのか。あの丘の向こうには何があるのか。男は夢中で汗だくになって歩き続けるのでした。夏のツンドラに咲く花々は見事です。ピンク、黄、青、薄紫。一瞬で通り過ぎる北国の夏を惜しむように、

小さな花々はそれぞれの色を精一杯に輝かせ、誰に見られることもなく一生懸命そこに咲いていました。いくつもの夏を越え冬を越え、花々は時が来ると静かにそこで咲きました。そんな時男は思うのでした。ああ、これでいいんだ。自分もこのままでいいんだ。何故か意味もなくそう思え、そんな時、男の心はとても満たされていました。

